

はじめに

座長 大谷氏

この発表会には、第一回から参加させて頂いている。分科会タイトルの観光は毎回、自分たちは観光をやっている訳ではないと物議を醸しだしている。ここでの観光は決して土産物屋でお金を取ったり、ドンチャン騒ぎをするものではなく、その地域の良いものを他所の人たちに見てもらおうという広い意味で捉え、各地域の面白い取組、熱心な取組を互いに紹介し合うものにしていきたい。毎回熱意溢れる発表で勉強になっている。今回も色んなことを勉強させていただきそうなので楽しみです。

西播磨のなぎさによる賑わいづくり

西播磨なぎさ回廊づくり連絡会代表 牟禮氏

大谷氏：パンフレットやキャラクターなどがこんなに有るにもかかわらず、他にどういうことが求められているのか？

A：私たちはもっと流入人口を増やしていこうということで、例えば赤穂市で旅館が増えたとか、ホテルが増えたかなど、そういうものさしで考えている。

Q：ある意味貪欲なんですね。

A：パンフレットなどもあるが他にインターネットなど情報発信の方法が他にないか模索している。

Q：5つのエリアでやっているということでしたが、それぞれのエリアで温度差のようなものはなかったか？

A：まず、2年交代で代表を変わっていきということで、各代表で違った手腕がある。今年で6年目なのでちょうど一周した。それまで各代表に課題を与えている。

Q：予算はいくらぐらいですか？

A：約20万円くらいです。

Q：ホームページはどこが作成しているのか？

A：自分たちで作っている。

：東京などでもインターネットが観光に欠かせない手段となってきたので必要なことになってくるでしょう。

姫路市の離島いえしまにおける観光まちづくり

いえしまコンシェルジュ 中西氏

Q：この会合はほとんど地域の方が熱い思いで発表されるが、余所者のパターンははじめて。どういったきっかけで現地に行ったのか？

A：たまたまですが、NPO いえしまのおばちゃんたちが特産品を作って都会の人たちにいえしまを知ってもらった、じゃあその次は何をしたらよいか。案内してくれる人たちが募集していたので、その公募に応募して行ったのがきっかけ。おばちゃんたちは募集のその先は考えていなかった。本当にそんな人は出てくるのだろうか？という思いだったみたいだが、たまたま私がそこに行って気に入って仕事も辞めて居付いた。

Q：以前からそういったまちづくりに興味があってそういった機会があれば行きたいと思っていたから、今回たまたまそういう興味があって応募したのか？

A：そうです。仕事も公共的なまちづくりに関係することをしていたので、どこかに移り住むのかも考えてはなかったが、いえしまに関わって考えがかわったので移住した。

Q：生計はどうしているのか？

A：最近ガイドをしていて、他に家庭教師などもしている。あと建築をしていたので図面なども描いており、朝に施工計画書、昼にバイトに行き、帰ってきて家庭教師をしているなんて日もある。

Q：ガイドはどういったチャンネルで入ってきているのか？

A：HPを持っておりそこから受け付けている。

Q：他のコンシェルジュの方も同じなのか？

A：他の方々はそれぞれ定職を持っており、休日にガイドをしに来る。

Q：中西さんは、いえしまにもっと人が増えてほしいのか？それとも現状維持していきたいのかどちらですか？

A：正直もっとにぎわせたい。しかし問題もある。これはジレンマで、おばちゃんたちもおもてなしにやっとなりに慣れてきた感がある。なので、急に客が増えられても困るので徐々に増やしていけたらいいかなという段階。

Q：先生、島というのはどこを観光するのか。も

っと行政に支援を求めれば増えていくのではないか？その辺の考えは？

A：集客、誘客に関わる取り組みを行うと、必ずその問題が出てくると思うが、数を増やすことで経済的効果を得るのか、経済的効果はともかくとして、他地域の人達と交流することで、その地域での生きがいを感じるぐらいでいいのか、その地域の大事なものを守っていくのが主なのか、この問題、私も関心を持っていますが、答えはでてこない。

Q：今おっしゃった事で地域内に何か反発が出ていたり、困ったことはあるのか？

A：それはありません。最初は外国人が来たら、町中の噂になるくらいだったが、今はまた外国人が来ているといった形で、そこまでの反発はない。

Q：大手の企業は絡んでないのか？ゼミ合宿などもHPで応募してきたのか？

A：そうです。旅行会社なども来てガイドはしているが、あまりそういったことは好きではないので、もうちょっと違った手法を考えたい。

季節を彩るおもてなしを ～名張市旧細川邸「やなせ宿」の取組～

まちなか運営協議会 会長 辻本氏

Q：結果を出されている団体として、他の方々も参考になったと思う。子育てをしている身として地域でこういったイベントをしていると子どもを連れて出かけやすい。一見ハード面の整備が重視されているかと思えるが、中で色々な催しが行われていて、今回は観光交流分科会での発表だが、地域の活動が集約されているものであるように思える。立ち上げは順風満帆だったのか？

A：いいえ。まず運営していく人材の育成から始まった。そして貸館料金は、近くに住んでいる人々が活動に取組みやすいように設定している。

Q：イベントに参加する市民や講師には、こちらから話をかけて来てもらったのか？向こうから来たのか？

A：学校にパンフレットを渡して、どうぞ来てくださいねと言ったり、やなせ宿に興味を持った人に声をかけたりした。

Q：ワンデイレストランはチャレンジショップ的になっているということだが、これはもともと狙っていたのか？

A：そうです。観光交流施設という名目であれば、やなせ宿は観光がなければ困るわけです。そこで、毎日11時半から1時半まで700円程度で1日20食くらい用意している。こういう古い施設なので食が無ければ人が来ないし、継続させるのが難しい。

Q：連携のために何か工夫はしているのか？

A：運営側はボランティアで運営費がないため、地縁を活かして広く協力を求め、各種イベントで連携をお願いしている。

「何もない」を地域資源と捉えた まちづくりとしての「歌とピクニック」

歌とピクニック実行委員会代表 近藤氏

- Q：出身が丹波だから「歌とピクニック」を始めたのか？
- A：そうです。長男なのでいつかは帰るので、どうせなら自分の好きな町にしようと思い勝手に始めた。
- Q：何もないを資源にするからには、他の団体などにも声をかけないといけないということですが、その声がけはどうしたのか？
- A：一人ずつ自分でパソコンを持って行って、パワーポイントで説明していった。最初は誰も相手してくれなかったが、徐々にメンバーも集まってきた。
- Q：お金はどうしたのか？
- A：最初は自分で出した。会場が1か月前に、1年前に予約していた場所が急きょダメになったが、みんなが助けてくれたおかげで結果的には入場料という形でお金が全部返ってきた。
- Q：学生はどうして来たのか？
- A：レポーターズキャンプというものを企画してインタビューの仕方、写真の撮り方、記事の起し方などを一泊二日でやるということ、たまたま広報がうまくいって、東京や大阪から集まった。キャンプが終わってからその人達にやってもらったことの取材をしてもらって、広報をしてもらった。インターネットで出して、たまたまそういう広報の伝手があったのでよかった。キャンプ料は大人12,000円、学生8,000円。
- Q：実行委員会のメンバーは？
- A：10人くらい。
- Q：サブターゲットの中に20代の女性も含まれているが、最近の若い人達は、経済的にも厳しい人がいるが、若年層の取り込みについて実際はどうだったか？
- A：20代が多かった。3年前に企画した時、山ガールなどのニーズがあるのはわかっていたので、おそらくニーズはあるだろうということの中で山の中でやった。
- 聴講者：私は実際にイベントに参加した。タイトルに魅かれ、興味を持ったので行ってみた。
- Q：選んだポイントは？
- 聴講者：何もないのが資源ですというタイトルがオシャレで、のんびりできるということが魅力的だったから。実際行ってみてよかった。
- Q：若手の方は関わっているのか？
- A：関わっていませんね。時間に融通がきく人が必要でそこが問題です。

みんなでつくるおばけ屋敷を通した 町の活性化促進

A-yan!!関西をアートで盛り上げるNPO代表 田中氏

- Q：最近、観光の一つとして町をみるといったものがある。アプローチとして文化をみてもらう事で今回のような新たな資源を生み出すものもあると思う。観光資源発掘が地域の発展に結びつくということもあると思う。
- A：今日、笑う部分も入れてみたが、なぜみんなが笑わなかったのかということ、真剣に聞きすぎていたからだと思う。このお化け屋敷は面白いと思う。しかし行政からするとこういった団体を呼ぶのは費用が掛かるから、自分たちでしようということになってしまう。しかし、これでも考えた人たちの発信になっているからすごいと思う。
- A：同じことをされても到底私たちには敵わないと思う。なぜなら、私たちはお金がないからこそネタを考えるのであって、僕らのお化け屋敷は所詮子どもがつくるものだから。
- Q：一度行政でやったと言っていたが、なぜそこから広がっていかなかったのか？
- A：地域のつながりがないから。地域の個性が強くそれぞれが分断してしまったため、それはそれぞれが発展していくからいいことでもある。だから今は個々の近い地域の中で活動し、そこからつなげていこうと考えている。
- Q：行政の市長などが投資してくれないとできないのでは？名張市は市長が出してくれるが。
- A：我々はお金がなくてもできる。大阪は自治のまちなので、それぞれで考えて活動しており、地域にはコーディネーター的な考えで入っていただき、後は自分たちで考える。拠点も現在無料で借りている。しかし我々もただでは生活できないのでそこは今考えている。最終的にはお金があるなら下さい。ないなら何か物を、それでもだめなら力だけでも貸して下さいと言っている。後は大阪の住民の力で何とかしていく。